

Problem Solving

# Case 3



横浜・東戸塚を拠点とするフリースクール

## おっち一塾

戸塚区

- |     |           |
|-----|-----------|
| 課題1 | 利用者の確保と対応 |
| 課題2 | 担い手の確保と対応 |
| 課題3 | 資金と場の確保   |

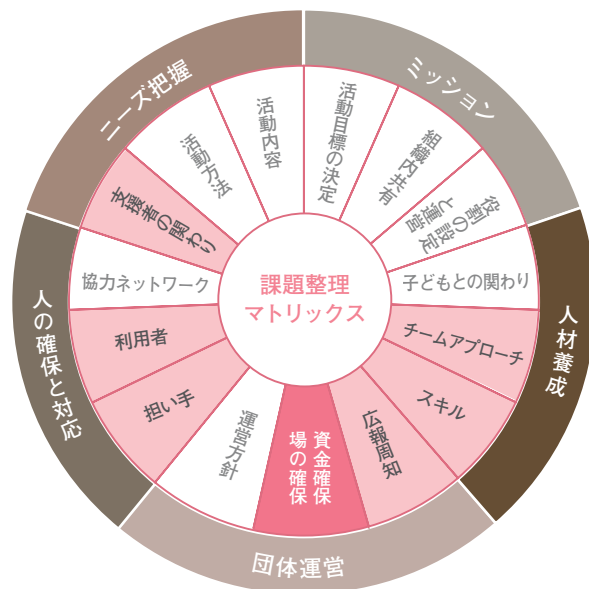
おっち一塾 地域の人々との関係性と心を育む“居場所”



火曜日スタッフ

JR 東戸塚駅隣接のビルの中にある「とつか区民活動センター」のミーティングルームが活動場所です。

「“学ぶこと”の喜びを分かち合い、実感してもらいたい」という願いをもって子どもたちに寄り添い、手助けする「おっち一塾」。オープンスペースでは、思い思いの対話があり、学ぶことへの関心と意欲が育まれています。



活動のきっかけ

2000年頃から、学校現場にも大きな変化が生じてきました。人件費削減、個人情報保護が求められるようになり、教員は事務業務が急激に増えました。また、自宅に持ち帰って作業することもあった成績処理等個人情報に関わる仕事を学校から持ち出すことが出来ないため、授業の空き時間や放課後にそれらの業務を行うこととなりました。次第に、教員と生徒とが共にいる時間が減ってくるという結果をもたらしました。

一方、学校だけでなく、家庭や社会も変化し続け、子どもの育つ環境に様々な課題が顕在化し、“生きづらさ”を抱える生徒たちの姿を見ることが増えてきました。子どもは“将来の宝”です。そんな“宝”を放置しておいていいのだろうか？そんな子どもたち・生徒たちのために「何かしなければならぬ。何ができるのだろうか？」と考えました。子どもたちが困ったり、悩んだりしているなら、そっと寄り添い、手を差し伸べることは大人の努めではないでしょうか？

退職後、大学生になった教え子たちと共に、そんな思いをもって「おっち一塾」を立ち上げました。教員時代、さまざまな生徒と関わりました。今から30年ほど前から徐々に不登校の生徒が増え始めました。それまで、「生徒指導」といえば暴力や喫煙等問題行動をとる生徒への対応でした。このような問題行動は、他の生徒への影響もある為、教員もすぐに対応してきました。しかし、不登校の生徒は学校に来ていないわけですから、教員の対応も遅れがちでした。その結果、修得単位不足で進級・卒業が出来ず、多くが「退学」の道を選んでしまいます。退学の結果、さまざま

この方にお聞きました

PROFILE

落合 嘉弘さん (72歳)

元神奈川県立高校教員。2008年 不登校生支援のボランティア団体「おっち一塾」を立ち上げる。2019年塾長を退き、顧問となる。



但馬 香里さん (46歳)

落合先生が紹介された新聞記事を見て、「いつかこの方のお話を聞いてみたい!」と切り抜いて大切に保管したことがきっかけになり、2年前におっち一塾を見学した日にとっても共感したことから活動を始める。たくさんの子どもたちに「あなたはあなたのままでいいんだよ」と伝えていきたいと思っている。元ウェディングカメラマン。現在、グリーンサポートが当たり前にある社会を作る一般社団法人リヴオンの事務局で勤務。



**所在地** 戸塚区川上町 91-1 モレラ東戸塚 3 階とつか区民活動センター  
**URL** https://occhijuku.weebly.com/  
**開設年月日** 2008 年 5 月  
**スタッフ** ボランティア 40 名  
**活動内容**  不登校児童・生徒への学習支援  
 学習遅滞児童・生徒への学習支援  
 コミュニケーションの不得意な子への支援  
 火・木曜日 16:00-18:00 (開塾日が祝日の際はお休み)  
 土曜日 13:00-15:00

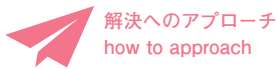
登録料 1,000 円  
 会費 10,000 円 / 1 カ月 (会費の納入法は相談に応じます)  
 外国と関わる子どもの日本語支援  
 火・木曜日 16:00-18:00 (開塾日が祝日の際はお休み)  
 土曜日 13:00-15:00  
 登録料 1,000 円 会費なし  
 不登校生・親の会を隔月で開催・イベントの開催

な体験、社会との関係性が希薄となり、自信を持って社会に出にくくなります。

学校に行けなくなる理由は千差万別。悩みも様々です。個々の生徒・子どもたちの問題解決のために、その子に寄り添う存在が必要だし、誰かが手を差し伸べていくことが必要です。「おっち一塾」の活動目的(ミッション)は、発足当時からずっと変わらず「“生きづらさ”を抱える子どもに寄り添う」です。常に、そこからスタートして、ボランティア・スタッフ皆で、その在り方を考え続け、子どもたちと共にいます。

## 課題1 | 利用者の確保と対応

### I 不登校児やコミュニケーションの苦手な子どもの利用促進と継続



解決へのアプローチ  
how to approach

#### 不登校児が行きたい・行きつづけたいと思う「居場所」に

立ち上げ当初は、子どもたちが居場所に訪れることはなく、閑古鳥。教え子たち、先生仲間、手伝うよと言ってくれた人など、スタッフのたまり場化していました(笑)。それが、徐々にHP や口コミで広がって、入塾希望の問い合わせが沢山入るようになりました。子どもたちが行ってみようと思う居場所。行きつづけたいと思う居場所はどんな居場所かとボランティアと共に考え続けてきました。

#### 具 体 策

##### ①基本はボランティアと子どものマンツーマン対応で

学校に行っていない子どもたちは、「勉強が分からない」「人とのコミュニケーションが苦手」など様々な不安を抱えています。おっち一塾は基本的にはマンツーマン。一人一人の子どもに寄り添いながら「解る」ことを通して喜びと自信をつけさせたいと考えています。

##### ②教科学習のみではなく、経験と仲間づくりを

おっち一塾では子どもの自主性を大切にしています。その日の活動は子どもたち自身が決めます。教科学習はもちろん、

おしゃべりしたい、遊びたいという希望に応じて対応します。また、夏祭りやクリスマス会などのイベント、料理体験や働く場の見学ツアー、宿泊体験など、1年間で行う様々な体験を通して、豊かな心や笑顔を作っています。

##### ③子どもたちの小さな変化に気付き、共有する

普段の活動時間や行事への参加によって、何もしゃべらなかった子が少し話したり、笑顔を見せるようになったり、狭かった話題が少しずつ広がったり・・・「小さな変化」ができてきます。スタッフはその「小さい変化」に気づけるように努め、皆で共有するようにしています。その他、慣れてきた生徒に関しても、元気があった・なかったはもちろんのこと、マスクを外さなかった、目が合いにくかった、友だちとトラブルが起きたようだ等々、子どもたちの変化や様子を共有しています。

情報共有のために毎回の活動後にショートミーティング、月に一度のロングミーティングを実施しています。

##### ④スタッフにだから打ち明けたことの対処

子どもがようやく口にした、心の不安や、葛藤、悩み等について、スタッフの間での共有はしますが、何かの危険につながるということ以外は、保護者にも伝えることはありません。スタッフは子どもの声を傾聴し、信頼関係を一番大切にしています。

##### ⑤いつもいるという安心・迎えてくれると思える信頼

子どもたちにとって、スタッフがいつもいてくれて、迎えてくれる存在になることで大きな安心を与えられると感じています。そして、大人の価値観を押し付けられることなく、何を話してもいいんだと思える、ありのままの自分を受け入れてくれる、そんな存在になることで、子どもたちにとって安心で安全な居場所になるのだと思っています。

## II 外国にルーツを持つ子どもの利用



解決へのアプローチ  
how to approach

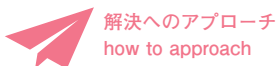
#### 更に努力し続けている外国にルーツを持つ子どもの支援

日本語を母語としない子どもたちにとって一番辛いことは、  
 ・友達とうまくコミュニケーションがとれない  
 ・学校の授業がわからない  
 ・社会生活がスムーズにいかない

子どもたちに「日本語」をいち早くマスターしてもらう手助けをしたい。そして、子どもたちの可能性を広げたいと思い、日本語支援の活動にも取り組んでいます。

外国にルーツを持つ子どもは年々増えていると思います。しかし、不登校の子どもたちほど、問い合わせがないのが現状です。まだまだ、対象となる子どもたちやその保護者に情報が届いていないのかもしれません。広報については、まだ途上にあります。

### Ⅲ 保護者にとっての居場所



#### 保護者にとっても「悩み」「辛さ」を吐き出せる場

自分の子どもが不登校になると、多くの母親は「ママ友」を失います。だからこそ、同じ悩みや不安を共有して「自分だけではない」という共感を保護者の間で持てることや、自分の気持ちを聴いてくれたり理解してくれる存在や場所は貴重で重要なことです。

入塾していない不登校の保護者でも「親の会」は広く参加可能にしています。

### 具 体 策

#### ①入塾時、保護者面接の実施

入塾希望の際には、必ず保護者との面接を実施しています。多くは母親との面接になります。不登校になった経緯や家庭での様子を丁寧に聴いています。

不登校について勉強している母親も多く、子どもが学校に行けなくても、家庭で学校へ行くことを強要するなどの登校刺激を与えない方が良いこと等理解している人がほとんどです。しかし、父親が共感できなかったり、祖父母から孫の不登校を責められた末、母親が家族の中でも孤立している等のケースもあります。母親が抱える様々な苦悩を知る場にもなり、寄り添い、ともに子どもを育てていくことの大切さを改めて実感

する時間にもなっています。

#### ②塾生以外の保護者の参加もOKに

おっち一塾の塾生以外の子どもの保護者の参加も可能にして、親同士の交流を進めています。孤立する保護者、子育てに悩みを持つ保護者が少なくなることを願っています。

## 課題2

### 担い手の確保と対応 チームアプローチとスキル養成

#### I おっち一塾のミッションに共感し 共に活動するボランティアの確保



#### 活動12年「おっち一塾ボランティア」の今

発足から12年。おっち一塾のボランティアスタッフは、登録約40名、実働は20名程度です。おっち一塾のスタッフは全員がボランティアです。大学生・社会人・定年退職後の人が、それぞれ3分の1ずつという感じです。

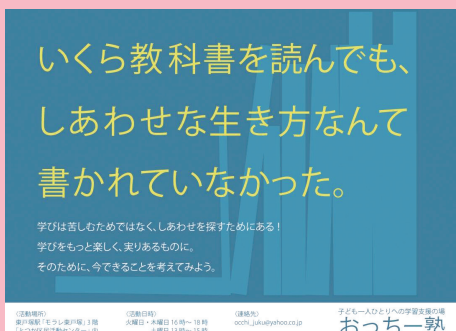
様々な年齢や立場の人が出会い、お互い影響や刺激を与えあう場になっており、スタッフにとってもおっち一塾は大切な「居場所」になっています。

### 具 体 策

#### ①ボランティアスタッフ面接

おっち一塾が、単に学習支援を進めるところではなく、子どもの主体性「やりたい」を育てるところであることを伝えます。やりたいは「勉強・遊び・対話」なんでもよし。

そして、一番大切にしているのは子どもたちが安心して過ごせる居場所作りであること、おっち一塾が大切にしているミッ



おてらおやつクラブからのお菓子の寄付



社会科学見学

ションや願いに共感してくれる人にボランティアスタッフになっていただいています。

また、面接時には、「子どもたちに大人の意見を強要しない」「子どもをありのままに受け入れる」「子どもの事情について根掘り葉掘り聞かない」等、おっち一塾の約束事を必ず伝え、理解していただいています。

## ② 専門的な知識やスキルを活かしたい希望者に

おっち一塾は、外国にルーツを持つ子どもの支援も行うので、「日本語を教える技能」など専門的な知識やスキルを活かしたくて、ボランティアを希望される方が来るとも時々あります。もちろん、それは塾として有難いことですが、おっち一塾が大切にしているミッションや約束事を守ることの方がもっと大切です。時に、自分を活かすのはここではないと思いついていく方もいますが、繰り返しおっち一塾のミッションや約束事を確認していくことで、団体内で大事にしているボランティアスタッフ像が共有できていると感じています。

## Ⅱ ボランティアスタッフの育成・チームアプローチの推進



解決へのアプローチ  
how to approach

おっち一塾ボランティアスタッフが集まり、共感的な活動ができてくることで、ボランティアスタッフが、自ら学び考える機会を求める声も挙がってきました。

### 具 体 策

#### ① 日本語教育研修

外国にルーツを持つ生徒（日本語が得意でない生徒）への学習支援方法について、ボランティアスタッフ自らが支援方法を考えてサポートしてきましたが、正しい教育法について学びたいという声も挙がり、専門家を招いて実施しました。言語学習の目標をどこに置いたら良いのか等、講師と対話しながら

主体的な学びの場とすることができました。

#### ② ボランティアスタッフ宿泊研修

子ども達により良いサポートをしていくために、自分たちに何が必要なのか考え、共に過ごす宿泊研修。個性豊かなメンバーが学びの材料を持ち寄り、教え合い、吸収し合う形式で実施します。また、日本の学校教育の根底にあるものは？いじめの原因になる思想は？等、日常の活動時間では話し合えないこともとことん話し合います。

こうした時間は、スタッフ間の結束を強くし、子ども達のためのおっち一塾ですが、ボランティアスタッフ自身のためにもおっち一塾が大切な存在であることを確認できました。

## Ⅲ 無償ボランティアスタッフの活動負担



解決へのアプローチ  
how to approach

ボランティアスタッフには交通費のみ支給しています。普段の活動はもちろん、団体を運営していくための労力は、それぞれのスタッフが可能な時間と可能な力を持ち寄ることで、実現しています。安定的に団体の活動を行っていくためには、ボランティアスタッフの負担はかなりのものです。

## Ⅳ 団体の運営・継続のためのリーダー的スタッフ



解決へのアプローチ  
how to approach

創設者の落合は、現在顧問という立場になり、塾長は但馬香里が担っています。また、運営管理チーム、コミュニケーションチーム、会計チーム、渉外チーム、広報チーム等で構成する運営チームを作り、組織として団体運営していく体制づくりを進めています。

塾長の但馬は、おっち一塾のことが紹介された新聞記事を見て、関心を持ち、おっち一塾を訪れました。落合の教え子で始めたおっち一塾は、現在ではHPで見つかったり、大学のボランティ



木曜日スタッフ



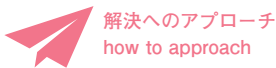
土曜日スタッフ

イベントで紹介された等、活動に参加するきっかけも広がってきています。

責任ある取り組みを継続していくためには、こうした主体的に活動に参加するボランティアスタッフの中から、リーダーを受け継いでいくことが必要だと思っています。

### 課題3 資金と場の確保

#### I ミッションに対する活動のための資金不足

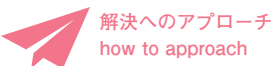


解決へのアプローチ  
how to approach

最も解決しにくい団体の課題だと思っています。助成金の申請は毎年していますが、該当する助成金を探したり、申請手続きをしたりするのは、時間的にも非常に厳しいことです。更に申請しても受けることが出来ない場合もあり、そういった年は財源的に厳しくなります。

現在は生徒からの会費や神奈川子ども未来ファンドからの助成金などがありますが、外国にルーツを持つ子どもや経済的に支払いが難しい家庭からは会費免除や減免しているケースもあり、スタッフの交通費やイベント開催費等、団体を継続していく為に必要な活動資金の確保は常に大きな課題となっています。

#### II スタッフの負担を軽減するための資金不足



解決へのアプローチ  
how to approach

私たちのような団体に、定期的な安定した補助金が提供していただけるような仕組みがあればと思います。若い学生や20代

のスタッフだけでも、アルバイト代程度の金額が提供できれば、もっと活動しやすくなるし、様々な居場所も増えるのではないかと考えます。

#### III 安定的な場を確保するための資金不足



解決へのアプローチ  
how to approach

開設当初、マンションの一室を借りていたことがありますが、ひと月10万円の家賃はとても支払い続けることができず、今は区民活動センターのスペースを無料でお借りしています。

#### 取材を終えて

ミッションが明確で、ボランティアスタッフにも浸透しているため、非常に安定的な活動が継続して行われています。その活動が、生きづらさを抱える子ども達や、その保護者を支え、自分を見出し、生きる意欲が持てるよう、柔軟な場と関係性が築けています。

志ある10代から70代まで、ごちゃ混ぜ感のある多世代の人があつまるこうした場は、利用する子どもに限らず、ボランティアスタッフにとっても居心地の良い、大切な場となっているというおち一塾。子どもたちにとって、地域にとって価値ある社会資源だと思いました。課題解決の努力を様々されていることを紹介しましたが、資金の問題は、おち一塾のみの問題と捉えず、解決策を探る必要があるかと思います。



<https://occhijuku.weebly.com/>

Problem Solving

# Case 4



都筑冒険あそび場

## まんまるプレイパーク

都筑区

課題1 | 担い手の確保と対応

課題2 | 広報周知

課題3 | ニーズ把握

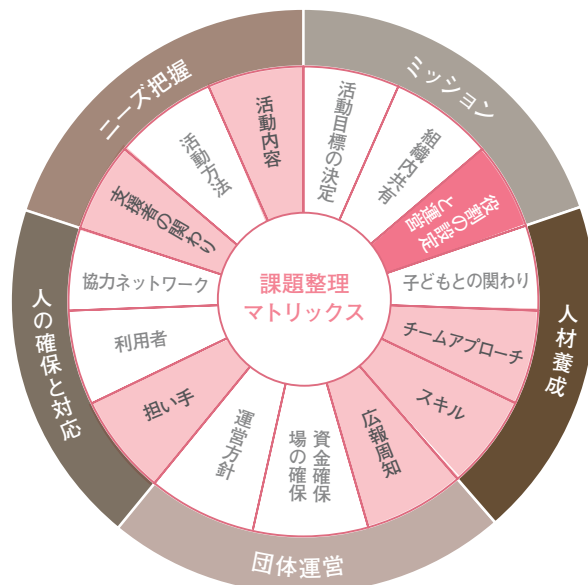
課題4 | 人材養成

課題5 | 役割の設定と運営

まんまるプレイパーク 子どもが夢中で遊べる場所を



鴨池公園まんまる広場周辺は港北ニュータウンの中央に位置し、住民の出入りが多い地域です。特に遊具などがあるわけではありませんが、日当たりのよい、緑に囲まれた広い空間は、新しく越してきた親子も気楽にふらっと立ち寄れる雰囲気があります。この公園の広場で、誰でも参加できる、自由な遊び場、まんまるプレイパークが開催されています。



活動のきっかけ

子育てサークルの仲間と「もっと自由な遊び場があったら、自分たちの子どもがもっとのびのび育つよね」と考えるようになり、どこかにそういう場所はないかとリサーチしたところ、「世田谷プレイパーク」を見つけました。早速見学したところ、子どもがのびのびと育つ場として、プレイパークへの関心が高まり、自分の住んでいる都筑区でもプレイパークを創りたいという思いが膨らんでいきました。

そのような時、横浜でプレイパークをつくらうネットワーク（現在のNPO法人YPCネットワーク\*1）があることを知りました。YPCネットワークの方々との出会いによって、プレイパーク立ち上げについての様々な相談をすることができるようになり、知恵と

この方にお聞きました

PROFILE

山崎 佳之さん (40歳)

プレイリーダー。ニックネームは「はんす」。もともとは役者志望で子ども向けの芝居もやっていたが、子どもの勉強をしたいと思い、いろいろな講座を受講する中で、たまたま、まんまるプレイパークと出会い、それを機に活動を始める。プレイパークでは、大きい子どもが小さい子どもの面倒を自然に見ている関係性や環境があることに感激して、「もし結婚して子どもができて、ここなら元気に子育てして生きていける」と感じ、10年間まんまるプレイパークで活動を続けている。



山崎 雅美さん (40歳)

プレイリーダー。ニックネームは「まさみっちょ」。保育士としての経験をもつ。夫の「はんす」とはこのプレイパークで出会い結婚。結婚式もこの公園で挙げた。公園そばの住まいで暮らしながら、ふたりのお子さん（2歳・4歳）もプレイパークで週の大半を過ごしている。「大人に遠慮しないで、思いっきり遊んで欲しい」という思いを大事にしながら、プレイパークでの活動を続けて13年になる。



西田 清美さん (54歳)

独身時代に実家大阪で 冒険あそび場の立ち上げを手伝ったことから「子育ては、こういう場所をしたい」という強い思いを持った。世田谷プレイパークを見学し、関心を深め、緑区の三保ねんじゅ坂プレイパークに世話人として参加。自分たちのまちにも是非プレイパークを作りたいと、様々な団体、関係機関の協力を得て、約3年をかけて、2005年12月まんまるプレイパークを開設。代表を務める。2019年、大阪への転居に伴い、代表を交代。





実施場所	鴨池公園まんまる広場（都筑区荏田3丁目）
活動日	毎週月曜日・火曜日 11:00～17:00 毎月第2・4日曜日 11:00～17:00 毎月第4金曜日 14:00～17:00
URL	http://manmarupp.ciao.jp/
開設年月日	2005年12月
利用者数	およそ100人（イベント300人）

利用料	無料
活動内容	<input type="checkbox"/> プレイパークの運営 <input type="checkbox"/> 不定期イベントの開催 ・青空フェスタ ・おそとで紙芝居 ・青空ヨガ ・絵の具あそび など

力を借りて準備を進めていきました。

立ち上げには、プレイパークを創ることに共感して協力してくれるメンバーが必要でしたが、当時、子育て中のママたちの講座を企画した仲間、まんまる広場で一緒に活動していた子育てサークルの仲間、都筑区の子育てフェスタ「子どもの遊び場について考えよう」に集った人たちなど、子どもや子育てに関心がある人、今、子育てをしている人などに声をかけ、メンバーになってもらうことができました。

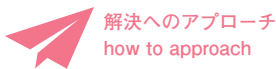
更に、都筑区の助成金を受けて連続講座を開催し、プレイパークに協力してくれる仲間を集め、自分の子どもの通う小学校のPTA会長、地域の自治会の方、鴨池公園愛護会（当初は、愛護会の中の一部の人や知り合い）の協力も仰ぎながら、まんまるプレイパークを立ち上げることができました。

#### 活動の目的

- 1) 「あれはダメ」「こうしなければならない」などの禁止事項や決まり事が極力ない、「子どもの自由な遊び場」づくり
- 2) 子どもひとり一人の個性が発揮できる場づくり「そのままで大丈夫」というメッセージを常に発信
- 3) 頑張らない子育てを親たちと共にする場づくり
- 4) 誰もがその人らしくいられる地域づくり

## 課題1 担い手の確保と対応

### I プレイパークの中心的キーパーソンの確保



#### 継続的にプレイパークを運営するプレイリーダーと世話人

#### 具 体 策

##### ① 同じプレイリーダーが継続的に活動することでの安心感

プレイリーダーは遊びのスペシャリストで、プレイリーダーが運動の機会を作りだし、魅力的な遊びを考えることによって、子どもが自然と遊びに入るようになります。また、子どもが遊びを楽しむには、プレイリーダーも本気になって子どもと遊び、子どもと一緒に自身も思い切り楽しむことで、子どもとの信頼

関係を深めていきます。子どもは、遊びを通して、友達を思いやる心や社会のルールなど、様々なことを学んでいきます。プレイリーダーは子どもの成長を健やかに促し、楽しませる役割を担う仕事であり、その存在はとても重要です。

「まんまるプレイパーク」では、活動日はプレイリーダー2名と世話人（ボランティア）1名以上で活動しています。プレイリーダーはYPCが雇用し、市内の各プレイパークに派遣されるという形態をとっていますが、まんまるでは主に山崎夫妻がプレイリーダーとして活動しています。そのため常にプレイパークや参加する子どもの様子に気を配ることができ、世話人との関係も継続していて、みんなが安心して活動に参加できるプレイパークになっています。

##### ② 子どもの成長と共に保護者が「世話人」に

プレイリーダーは仕事として活動していますが、世話人は市民が行うボランティア活動です。世話人は常時30名程度いますが、入れ替わりはあります。直接応募してくれることもあります。子どもが小さい時、利用者として参加していた母親が、一緒に遊んでいた子どもたちのことが気になり、子どもが大きくなったのを機に世話人として活動に参加するケースもあります。そのため活動時間は個人の状況に合わせて柔軟に設定し、午前中だけ、幼稚園のお迎えまでなど本人の都合に合わせて対応しています。

参加の保護者の様子を観て「この人はプレイパークが好きだな、世話人になってくれるかな」と思う人にはプレイリーダーが声をかけて協力をお願いすることもあります。

##### ※1 NPO法人YPCネットワーク

市民と横浜市が連携して、子ども達の「やりたい」という気持ちや発想を大切にし、自由にのびのびと子ども時代を過ごせる遊び場（＝プレイパーク）を、子どもの生活圏に創る活動を行っている。

##### ※2 プレイリーダー

子ども達が遊び場で生き生きと遊ぶことを補助し、そのための環境を作る人のこと。事故などが起きないよう、安全に配慮した遊び場創りをするのもプレイリーダーの役割。子どもに合わせて柔軟に動き、手作りのおもちゃ制作や運動遊び、屋外での冒険遊びなど、子どもが遊びを通して成長できるよう促す。



## 課題2 広報周知

### I プレイパークの認知度が低い



#### 地域とつながってプレイパークが認知され発展する

まだまだ、プレイパークを知らない人が多く、知ってもらおうためのアプローチが必要です。「知らない」にも種類があります。

- 1) プレイパークが何をするとところか知らない
- 2) 地域の公園にプレイパークがあることを知らない
- 3) 利用対象者やプログラム、イベント情報を知らない
- 4) 誰が運営しているのか知らない

それぞれの「知らない」を解消できたら、もっと地域の子どもたちが元気よく遊ぶことができ、保護者同士、また、保護者とプレイパークのスタッフたちとのつながりも生まれて、子育ての不安や心配が軽減できるかもしれません。

「まんまるプレイパーク」に来る親子の中には、引っ越してきて間もなく知り合いもない、子どもを遊ばせる機会もなく地域の情報をあれこれ調べて、ようやくプレイパークをみつけたという人がいます。もっと、プレイパークの情報を入手しやすいよう工夫する必要があると思っています。

### 具体策

#### ①都筑区の子育て支援拠点「ポポラ」とのつながり

プレイパークのイベント開催協力を得て、参加者にプレイパーク情報を発信し、チラシやパンフレットを配架しています。

#### ②地域の小学校とのつながり

プレイパークのチラシを10年にわたり継続的に配布してもらっています。

#### ③地縁役員・公園愛護会の理解と協働

地元の地域との関係性を少しずつ深めていく中、自治会町内会等の地縁役員や公園愛護会の理解が得られ、公園に物置を設置しプレイパークの備品を置かせて頂いたり、プレイパークの活動をするにあたり、公園内で火を使うことができるようになりました。

こうした理解と協力の広がりや、プレイパークの活動がしやすくなったり、子どもたちにとって、必要な経験をするための活動ができるようになるなど、プレイパークの活動を発展させます。プレイパークは地域と共にあって、地域に育てられていると思っています。

#### ④小学校や保育園がプレイパークを活用

小学校、保育園、学童保育所など地域の子どもたちの関係機関が、プレイパークを知り、プレイパークとともに、子どもたちにとって効果的な遊びの場としていくことで、プレイパークは、その存在意義を高めていくことができます。

例えば、近隣小学校の総合学習の授業の一環で、子どもたちが先生の引率でプレイパークを利用したことがあります。子どもたちは、プレイパークの場で、自由な発想で様々な遊びを考え、体と心を存分に働かせました。そして、これを機会に数名の小学生が、一人でもプレイパークに来て遊ぶようになりました。また、プレイパークで火を使用していることを知った地域の保育園から、焼き芋ができないかと相談がありました。園児たちが保育士さんと一緒にプレイパークで思い切り遊んでいる間に、高齢の男性世話人や子育て中の世話人が、焚火を準備。ホカホカの焼き芋が出来上がり、みんな大喜びでした。近隣の学童保育所の子どもたちは、プレイパークによく遊びにやってきます。学童保育の子どもは定期的に利用しているので、プレイリーダーも顔見知りや、子どもたちからニックネームで呼ばれています。

## 課題3 ニーズの把握

### I 様々な子どもへの関わり方



#### 誰でも気軽に自由に居ることができる場

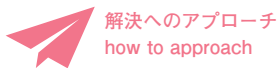
「まんまるプレイパーク」には、気が付くと、家庭に難しい課題のある子や、学校に行っていない子、同じ仲間と同じことをするところではなじめない子どもが集まってきます。彼らが、若者になって子ども時代を振り返るとき、「プレイパークが当時の自分にとって救われた場、唯一自分で行くことができた場だった」と気づくことがあると聞きます。

プレイパークの担い手は、不登校の子どもに対する専門知識を持った者はいません。しかし、子どもたち、一人ひとりの抱える課題には、プレイパークにいるスタッフ皆が、長い時間をかけて理解に努め、癒し合い、支え合います。だからこそ、成長の



過程の中の様々な状況の中でも、子どもたちの拠り所になり続けていると感じています。誰でも自由に來ることが出来る屋外の居場所は、とても重要だと思っています。

## II 子ども本位の居場所づくり



### 子どもの主体性を育てる

子どもの育ちや自立を阻む要因について考えるとき、子どもを育てる環境が、大人が管理しやすい場や機会ばかりになっていると思います。大人が責任を負うような状況になることは極力避ける、こんな社会の中では「子どものやりたいこと」は尊重されない。やりたいことがあっても、大人側の事情でできなくなる。子ども自身も、大人の考え方に合わせるようになり、自分の意見を発信しなくなる。大人をつくる子どもの居場所は、大人目から見て「役に立つもの・誰が見ても良いと思うもの」であり、本来、子ども自身が求める、自分が「面白い」とか、誰にもわからないかもしれないけれど「自分にとっては大切」とか、そういうものでなければ、子どもの拠り所となる居場所にはならないと思います。

そういう意味で「まんまるプレイパーク」は子ども本位の、子どもの居たい場所にしたいと思っています。

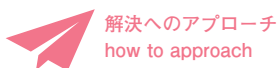
### 親にとっての居場所も必要 多様な交流が人を支える

子育ての不安や大変さを抱えて、まんまるに来て仲間になる親子がいます。わが子だけを見ていると煮詰まってしまうけれど、ここでは皆で、すべての子どもを見守る。自分の子どもだけではなく、他の子どもも見守る中で、学ぶことも多く救われるのだと思います。

特別な枠組みもなく出入りも自由、学区の違う小学生、中学生など、出会わなかったかもしれない子どもたちが出会って、本当に仲良くなる場所。本当に気の合う友達、同じ学校、同じ学年とは限りません。ここでは年齢・性別も超えて仲良くなり、本当の家族のような関係性が出来る。そこが良さだと思います。

## 課題4 人材養成

### I スキル・チームアプローチ・価値観の共有



#### 定期的なプレイリーダー・世話人研修

#### 具体策

##### ①月1回、研修日を設けて

プレイリーダーの派遣元である YPC では月1回研修を実施

しています。講師は他自治体で活動するベテランプレイリーダーや専門家などです。プレイリーダーとしての悩みや迷いについてスーパーバイズしてもらったり、具体的なスキルについて学んだりしています。世話人は、月に一度、半日の活動日に、プレイリーダーから具体的な遊び方やロープワーク、リスクとハザードなどについて学ぶ機会を設けています。その際に気になる子どものようすなどを話し合う時間も作っています。

##### ②気持ちを一つに、まんまるを育てようとする意識

プレイリーダーである山崎夫婦は、まんまるプレイパークに関わり続けたいと公園の隣に引っ越しました。まんまるプレイパークとの関わるきっかけは、プレイリーダー、世話人共に様々かもしれません。でも「まんまるが大事」という気持ちは皆で大切にしたいと思っています。

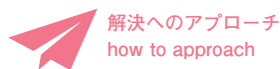
子どもたちの育つ環境は、変化し続けています。子どもたちにとって、遊びや仲間は、いつの社会でも必要なものだけれど、変化する社会の中で、まんまるがどんな遊びの機会を子どもたちに提供するの、また、どのように子どもとの関係を築いていくのかは、まんまるチーム皆で語り合う必要があります。

一人の小さな想いや考えを言葉にして共有することで、課題解決の道が拓けたり、新しい取り組みの発想も湧くと思っています。

##### ③皆が意見を出しやすくするためのファシリテート

まんまるが大事だから、想いがあるから、時には意見がぶつかることもあります。言いにくいことを発言しなければならないこともあります。大切な皆の意見が出しやすいように、こうした機会には、外部から皆の意見がスムーズに出せるよう、また、皆からどんな意見が出されたのか客観的にまとめるファシリテーター役の方をお願いすることもあります。

## II 新たなまんまるの在り方を探る



### プレイパークが子どもに資するものであるために

居場所同士の繋がり、地域の様々な方とのつながりが大切と思います。“子どものことは子どもから学ぶ”姿勢が大切だと思



います。少子化が加速していて、大人が意識しないと、子ども一人の周りに大人が何人も囲むことになっていきます。常に大人の管理の下で子どもは生活し、自分でものを考え、判断して、生活するという経験を失っていきます。

家庭や学校だけではなく、地域で、どう子どもを見守り育てるのか、様々な居場所や子どもを想う人々が繋がる必要があり、それを共有していかなければと思っています。

## 課題5 役割の設定と運営

### I 組織が継続していくための見直し



「まんまるプレイパーク」立ち上げから13年目。設立当初から代表を務めていた西田さんの大阪への引越しが決まり、代表交代が必要になりました。新代表を決めるにあたり、代表の仕事とはどんなことなのか、共通理解ができていないことに気づきました。また、どのように新代表を選出すべきか考える必要があることにも気づきました。

#### 具 体 策

##### ① 代表の仕事とは何かを世話人で共有

プレイパーク開催の申請提出書類作成／プレイパークネットワークの代表者会出席／毎月の報告書提出／毎月の定例会開催／必要な研修や助成金申請／地域や区との連携、会議への出席／近隣の小中学校へのあいさつ、広報／そのほか団体との連携／イベントの開催、協賛など／SNS、ブログ、ホームページ作成

##### ② 新旧交代までのプロセス

代表の仕事を書面化する→プレイパークの仕組みを印刷し、世話人等に配布、説明→プレイリーダーと旧代表がファシリテーターになり、新旧の世話人が語り合う場を開催→代表を決めるための話し合いを数回に渡り開催→自分ができること、できないことを出し合い、分担等を決定

##### ③ 新たな代表の決定

話し合いの結果、世話人の佐々木さんが「次の代表が決まるまでの任期であれば引き受ける」「みんなの支えが必要」との条件つきで引き受けてくれました。

そこで、新代表をサポートする形で、書類の作成、ITを活用した広報の実施など、数名の世話人さんで分担しました。また、地域関係団体などとの連携には、それぞれの世話人が住んでいる地域や子どもの通う学校などを担当。研修の企画実施などは、経験豊富な世話人が中心となり実施することとしました。SNSの活用などについては、新しい人材も加わり協力してくれることとなり、より充実させることができる結果となりました。

#### 取材を終えて

「居場所」というと、多くの人が、屋内の空間を想像するでしょう。「まんまるプレイパーク」はもちろん、プレイパークは、地域の子どもたちにとって、まぎれもない「居場所」です。仕切りもない空間は自由に入りでき、遊びの達人のプレイリーダーや世話人と共に、様々な年齢の子どもたちが主体的に遊ぶ場は、ワクワクする面白さがあり、心が動きます。

昭和の時代には、こうした、雑木林や空き地などがそこかしこにあって、当たり前、異年齢の子どもたち同士で、日が暮れるまで遊んでいました。時にはケガやケンカもあったでしょう。でもその中で、子どもたちは育ちました。自ら安全を守ることや仲間を大切にすることも学んだでしょう。プレイパークは、現代社会で、そうした子どもの育つ場を取り戻そうとしている社会資源だと思います。人工的なものを極力省いた自然空間で、人を育て、地域を育てています。

横浜市には、NPO法人 YPC ネットワークがあり、市民と行政が連携して、自由にのびのびと子ども時代を過ごせる遊び場「プレイパーク」を生活圏に創る活動を行っています。これからも、子どもたちを心身ともに健康に育てるために、地域の中で、子どもを育て、プレイパークも育てていく取り組みが活発に行われることに大きな期待を持ちました。



Problem Solving

# Case 5



学習支援・ごはん亭

## 山芋の会

南区

課題1 | 活動内容・活動方法

課題2 | 支援者の関わり

課題3 | 協力ネットワーク

課題4 | 資金と場の確保

# 山芋の会 山芋のような粘り強い、生活力のある子どもに育てたい！



山芋の会は、弘明寺駅近く、奥まった古いアパートの1階、1DKの1室。そこで小学生、中学生を対象にした学習支援を週4日実施しています。子どもたちにとって自然との触れ合いが大切と考え、魚釣りやキャンプなどの体験も月1回行っています。

昨年秋までは週1回の夕食の提供も行っていました。残念ながら大家さんの都合でこの場を3月末で立ち退かなくてはならず山芋の会としての活動は閉じることになりました。今後は別の場で、新たな活動を始める予定です。

この方にお聞きました

PROFILE

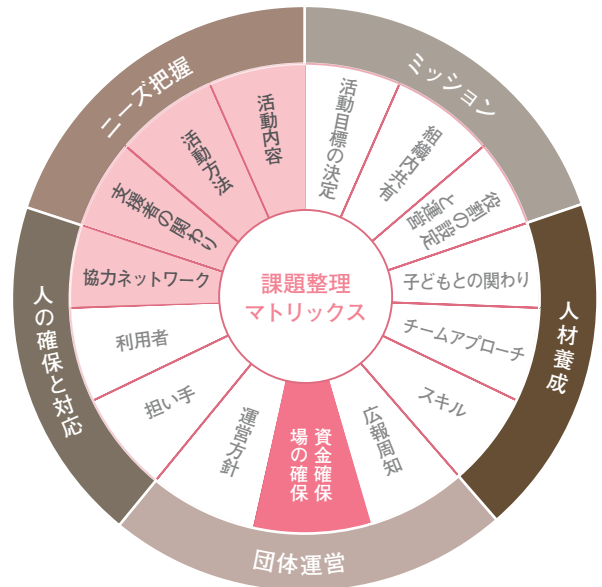
伊藤 富美恵さん (69歳)



学生時代より女性問題に興味をもつ。  
1980年、28歳の時、戸塚区の古民家で7人の子どもの対象にした学童保育の指導員となる。8年位の間に、通ってくる子どもは50人以上に増えたが、運営のあり方に疑問を感じ退職。  
その後、41歳の時、再び南区の学童の指導員となり、20数年勤めたが、社会における学童保育の役割と実際の姿に違いを感じるとともに、学校の勉強についていけない子どもの問題が気になり、そのような子どもたちを支える学習支援を行うために「山芋の会」を立ち上げ今に至る。

活動のきっかけ

20年以上、学童の指導員をしている間、社会は変化し続け、家庭や子どもの暮らしは様々な影響を受けていました。働く女



性が増え、結婚・出産後も仕事を続けることが次第に当たり前になり、働きながら家族を守り、子どもを育てるという暮らしに時間も心も奪われ、余裕のない親が増えました。子どもにとっても、家庭という場の安心感が奪われているように思いました。一方、このような社会を背景に、学童保育のニーズが高まり、子どもの受け入れを拒まない学童は、急激に大規模化し、ひとり一人の子どもに丁寧に関ることができなくなっていったように思います。

共働き家庭の子ども達を放課後預かり、家庭の補完としての役割を果たそうとしていた学童保育が、物理的な預かりには応えられても、本来の役割が果たしにくくなっていることはとても残念なことであるし、子どもを育てる場である家庭・学童保育が共に課題を抱えることになっては、子どもたちに大きな不利益が生じると感じました。

しかしながら、通勤に時間がかかる、残業があるなど勤務先の課題や収入確保のための長時間労働やダブルワークは避けられないなど、親の働き方は多様化する一方です。また、家族形態についても核家族化は一層進み、一人親家庭も増加し続けています。

経済状態は子どもの暮らしに大きな影響を与えますが、経済的には恵まれていても、両親ともに勤務地が遠かったり、労働時間が長いなどの状況がある場合、子どもが一人の時間を、習い事や塾などを利用することで解決しようとする家庭もあり、

## 団体概要

所在地 南区六ッ川1丁目 山之井荘1階  
開設年月日 2015年4月  
スタッフ 3名  
活動内容 □ 小学生・中学生の学習支援  
週4回(月・火・水・木) 16:30～  
会費500円 月謝(5000円～)

□ 夕食の提供(現在休止中)  
毎週金曜日 18:00～ 1食500円  
会費500円 月謝(5000円～)  
□ 自然体験(ハイキング、釣り、キャンプなど)  
毎月1回、夏休み

子どもはとても忙しく、親子で過ごす時間が少ない子どもがいます。また、経済的に厳しい家庭では習い事や塾にも行かせられないし、学力も遅れがちになり、親も子ども、助けを求められず、学童保育での長時間保育に依存し、心身ともに疲れた親と学童保育から帰り遅い夕食を食べる。そんな家庭や子どもをたくさん見るようになりました。

### たくましい子どもに育って欲しいから 学習支援「山芋の会」誕生

2015年4月、元学童保育の指導員3人と6畳一間を借りて、子どもの学習支援を始めました。立ち上げに当たり、区役所に、利用する子どもの紹介等をしてもらえないかと相談に行きましたが紹介は難しく、勤めていた学童で、毎日親の帰りが遅い子ども等に学習支援に行ってみないかと声をかけてもらうようにしました。

現在の山芋の会の活動場所は、学童保育のOBが紹介してくれたアパートの1階です。「山芋の会」という名前は、「山芋」はとても生命力の強い植物で、田舎の山にも、そして都会のコンクリートの隙間からも生えるたくましさがあること。また、大関松三郎の詩集の「山芋」が大好きだったことからつけました。

### 子どもにとっても保護者にとっても 居心地よく温かな場でありたい

学習支援は月・火・水・木の週4日、16時半から小学生の国語と算数、18時半から中学生の英語の学習をみえています。現在は小学生が10名、中学生は4名参加しています。保護者の方と面談してから利用してもらうようにしています。

2015年7月から毎週金曜日の夕方、「ごはん亭」を始めました。保護者も含め15～18人が参加し、ぎゅうぎゅう詰めですが、大家族の夕ご飯という感じです。学校が終わったら、「山芋の会」で週4回勉強をして、週1回はみんなでご飯を食べる。そして毎月1回、みんなで自然体験としてハイキングに出かけたり、釣りをしたりします。「同じ釜の飯を食べた仲間」といいますが、一緒に体験し食事をする子ども同士、保護者同士、仲間意識が芽生え、つながりが生まれます。

貧困問題が子どものいる家庭に増えていますが、経済的な貧困ばかりが課題ではありません。食生活・学習環境・基本的な生活習慣など複合的な課題があります。

「山芋の会」は、子どもや保護者との関係を大切に、課題を予防すると同時に、子どもや保護者を地域から孤立しないよう、様々な活動を行っています。

「山芋の会」や「ごはん亭」が、子ども達に寄り添おうとしている私たちと共に、生活に根差した居心地よく、楽しく気が抜ける場所であることが一番と思っています。また、働く母親にとっても安心できる場でありたいと思っています。

## 課題1 | 活動内容・活動方法

### I 子どもの生活課題対応と保護者支援



#### 子どもも保護者も抱える生活課題

#### 具 体 策

##### ① 保護者と共に考えにくくなった子どもの放課後

学童保育は、子どもたちが安全に安心して過ごせる居場所です。1980年頃の、共同保育時代には、どのような学童保育であれば子どもにとってより良い学童保育なのか、保育内容や運営方法を指導者と保護者が一緒に考え、協力して運営していました。当時は、保護者の働き方も今は違っていたし、学童保育を利用する子どもは今ほど多くはなく、親も子ども地域とのつながりがあったように思います。

保護者が主体的に我が子や地域の子どものことを考えること、また、親同士、時には支援者と共に子どもたちのことを考え、より良い環境を創ることは、子どもたちのためだけではなく、保護者の養育力を向上させ、地域からの孤立も防ぐことになると思います。まだ解決には道なかばですが、「保護者と共に」を大切に考え続けたいです。

##### ② 居場所が多様化するなかで居場所のない子どもたち

横浜市の学童保育は、毎月18,000円程度の費用がかかります。放課後、子どもを預ける場へのニーズが高まる一方、この費用負担が厳しい家庭も増えています。

横浜市には、各小学校に「放課後キッズクラブ」という居場所があり費用負担も低いため利用する子どもも多くなっています。どんな居場所も、子どもたちが毎日通い続けたい場所とならないことがあります。何となく馴染めない。だから、いつの間にか行かなくなってしまった。行かなくなっても、どう

して来ないと気にされることもない。などの話を聞くことがあります。

家に帰っても家族がおらず、居場所のない子どもたち。コンビニ等、町の中をさまよって買い食いをしたりしながら過ごす子どもの姿を観ると、「居場所」の必要性と在り方を深く考え取り組んでいくことが大切と考えています。

### ③子どもはもちろん保護者にも必要な社会的支援

保護者の労働状況が変化する中、労働時間の長期化は子どもに大きな影響を与えています。保護者の帰宅時間が遅くなることで、子どもが一人である時間が長くなります。習い事や塾に通っている経済的にゆとりのある家庭もありますが、それはそれで、子どもは毎日忙しくなります。遅い時間に帰宅する保護者は心身ともに疲れ、子どもとじっくり関わるができなくなります。また、子どもには自覚しにくい不安や心の貧しさのようなものに、保護者が気づけなくなり、いつのまにか子どもの心身の健康が脅かされることさえあります。こういったことから、子どもにはもちろんですが保護者にも寄り添った支援が必要だと思うのです。

そこで考えた活動が、夕食の提供をする「ごはん亭」です。子どもだけでなく保護者も兄弟も参加して、ワイワイ楽しく食事をする、家庭では味わえない大勢での夕食の提供です。できるだけ旬の食材を使って、栄養バランスを考えたメニューにしています。お米以外はあまり寄付に頼らず、どうしてもみんなでの食事を実現したく、自前で食材を購入して作っていました。

子どもの問題には、親の問題も同時にあり、親への支援も大切ですが、大人はなかなか変わることはできません。だから、優先すべきは子どもと考えています。お腹を空かせている子にご飯を提供し、勉強についていけない子には、学習の支援をしようと考えています。

但し、制度にも考えて欲しいと思うことがあります。横浜市は、子ども食堂を始める団体には市が支援（経済的）するという話も聞きました。市民活動の必要性があると考えているからとは思いますが、子を支え、親も同時に支えるには、「中学校の給食」を実現することは重要なことだと思っています。これは育ち盛りの中学生の健康を守り、経済的な負担だけでなく、時間や肉体的な親の負担を減らし、何よりも子どもが安心

して学校に来られます。不登校も減るかもしれません。子どもが安心して暮らし、食べ、成長することは、子どもの権利であり守るのは国の責任だと思います。

\*ごはん亭は、メンバーの体調不良があり、昨年10月から休止しています。

## Ⅱ 不足する生活体験、自然体験



### 生活体験・自然体験を子どもたちに

#### 具 体 策

##### ①さまざまな生活体験を活動の中で

山芋の会では体験を大切にしています。15年ほど前、学童保育の指導員だった頃、子どもたちと工具を使って自転車を解体してみたり、プロミスリングやビーズ細工など、男女問わず楽しく作って、バザーなどに出品したりしていました。最近は手先を使って物をつくるなどの機会が減っているのか、手先の仕事が苦手な子どもが増えているように感じます。

また、自然の中で遊ぶ経験も減少しており、自然を活用した遊びも知りません。月1回のハイキングや魚釣りなどの自然体験は、一つのニーズと捉えて取り組んでいます。自然体験は、藍染め体験、羊毛からの織物づくり、家庭ではなかなかしなくなった味噌づくりや梅干しづくりなど、さまざまに発展して、みんなで楽しんでいます。

##### ②教科学習以外の経験が子どもの生きるチカラを育てる

夏休みにはキャンプに出かけます。自分たちで炊いたご飯と自分たちで作った梅干でおにぎりを作って食べます。自然の中で、火やナイフを使う体験は子どもの生活力を高めます。

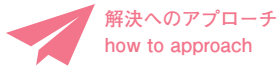
たくさんの体験をして、その成功体験が子どもに自信をつけ、体験から自分の将来や夢が生まれてくると、子どもたちを観ていて実感します。自然体験のプログラムは、生活の基本を身に着けることを促し、生きるチカラを育てていくと考えています。





## 課題2 支援者の関わり

### I 子どもとの関係のもちかた



#### 安心できる支援者と子どもとの関係づくり

#### 具 体 策

##### ①居場所に来ることが第1歩

中学生の学習支援を始めて、初めに来たのは不登校の子どもでした。彼はここでは勉強はせず、本を読んだりしながらごろごろ過ごしていました。寝転んですごせるというのは安心できているからかなと思っていましたが、継続して通い続けていました。次第に、釣りが大好きなことが分かり、釣った魚のさばき方を教えると、それが特技になりました。ここでも魚をさばいてくれます。誕生日にはおじいさんにリクエストして包丁をプレゼントしてもらったそうです。

##### ②子どもが育つ環境を知り

###### 子どもの心身の成長に寄り添うこと

今時の社会は、情報過多、ネット社会などと言われています。常にせわしく、情報が行きかう中に子どもたちもいて、それは、子どもにとって、当たり前環境になっているかもしれないけれど、自分の心や体をゆっくりと育てる環境が失われていると感じています。周りの大人は、子どもにゆっくり寄り添い、子どもの成長を見守り、支えることが求められていると思います。「山芋の会」はそれを実現したいと考えています。

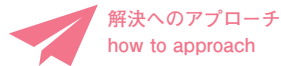
##### ③子どもたちの様子や会話から理解を深める

子どもたちは「山芋の会」で、親の前では言えないことや学校では話さないだろうことも子ども同士でおしゃべりします。その会話の中に、学校でのいじめや虐待、先生のことなど、気になるキーワードが出てくる場合もあります。それとなく耳を傾けて聞いていますし、何かの時のために、気になることはメモを取っ

ています。そして子どもの普段の様子には気を付けるようにしています。

## 課題3 協力ネットワーク

### I 専門職とのネットワーク



#### ネットワークを活用した子ども支援

#### 具 体 策

##### ①継続的な利用のための連携支援

立ち上げ期は、行政とのつながりも得られないまま行っていました。南区の子ども食堂ネットワークなどで、「山芋の会」の活動を知った区役所の子ども家庭支援課をはじめとする様々な機関から、子どもの紹介が来るようになりました。しかし、残念なのは、子どもに意志があっても保護者の考え次第で継続的な利用にならない場合があります。なんとか子どものために、継続利用できるよう多機関で協働で支えられたらと思います。現段階では難しいです。

##### ②重い課題を抱える子どもへの対応

夜間、携帯が鳴り、無言電話の向こうに大変気になる状況や子どものSOSを感じる場合があります。不定期に「山芋の会」を利用する子どもの中には、家庭環境に明らかに問題があり、食事も満足に取れていない子どももいて、相談機関に連絡を入れたこともあり。相談機関には、子どもの氏名・学校名など、事務的な情報を次々と尋ねられました。やり取りをしながら、この電話が子どもにとって不利益がもたらされないか、むしろ不安になり、詳細を話すことにためらいを感じました。このケースに関しては、電話対応の相談員の方が、「また電話します」と言われ待っていましたが、連絡はありません。子どもにも保護者にも、それを支援する私たちのような団体にも、共に考え、寄り添ってくれる相談機関が必要なのではと思います。



梅干しを作る作業をみんなで体験しながら覚えていく。



みそ玉を一生懸命丸める。自分で作るとまた格別に美味しい。

## 課題4

## 資金と場の確保

### I 失ってしまう活動の場



解決へのアプローチ  
how to approach

#### アパートの閉鎖と共に失われる活動の場

#### 具 体 策

##### ① 資金なく、場も失う「山芋の会」

現在のアパートは格安の家賃で借りていますが水道光熱費は発生します。運営は社協のふれあい助成金と、学習支援の月謝、ご飯は参加費でなんとかやってきました。キャンプや行事の経費はバザーなどで賄ってきました。

狭いながらも子どもたちにとってはくつろげる場でしたが、大家さんの都合でこの3月でアパートは閉鎖されることになりました。活動の継続のために近隣で物件をいろいろ探しましたが、残念ながら適当な物件は見つかりませんでした。仕方なく弘明寺からは一旦撤退することとなりました。

細々とですが5年間、子どもと関われたことは子どもたちにとっても私たちにとっても大切な時間でした。現在参加している子どもたちや、長い間支えてくださった保護者の方には申し訳ないのですが、「山芋の会」のような活動にとって、資金と場は最大の課題です。

##### ② 「子どもの居場所」のための公的な支援の期待

空き家、空き部屋はたくさんあっても、こうした取り組みに使うためには、高いハードルがあります。子どもや保護者を支援するために「場」は欠かすことができません。なんとか、必要と認められる取り組みに対して、公的な場の確保の支援（場の提供や家賃補助等）ができないものでしょうか。横浜市には子どもが自由に利用できる児童館がありません。子どもの食の問題も中学校に給食があれば、かなりの子どもの栄養状態が改善されるはずです。

#### 新たな活動の始動

#### 具 体 策

##### ① 自治会に子どもの居場所の必要性を伝え続けて

地元の六ツ川団地へ場所を移し活動ができることになりました。自治会に、子ども支援の必要性や居場所づくりの要望を伝え続け、地域の皆様から賛同を頂きました。

また、山芋の会にあるたくさんのお本を団地の図書室に寄付させてもらい、その児童書を利用した活動と学習支援を、連合町内会の活動として、月1回から始めることになりました。

##### ② 子ども食堂を始める動きも

子ども食堂の活動も始めたいという動きがあり、形は違っても、一緒にやっていけたら良いと思います。山芋の会を閉じるのはとてもさみしいのですが、5年間よく続けられたとも思います。

あまり大人数でなく、一人ひとりの子どもにゆっくりかわれる、「敷居の低い子どもの居場所」。いつ行っても誰かしら子どもがたむろして親の前では言えないようなことも言い合っ、ふざけ合い、そばにはニヤニヤ聞いているだけの大人がいて、勉強のわからないところがあれば一緒に考えて付き合ってくれる、そして低価格のご飯が食べられる、そんな「居場所」を今後も創ることができたらいいなと思っています。

人は、どこかに属して、アイデンティティが形成されるのだと思います。同じ釜の飯を食い、意見の違う人がいるんだということ認識し、時には身体と心でぶつかり合い、喜怒哀楽を共にし…。自分と他人は違うんだ。でも共に生きていくんだと理解することは、人と人が認め合い、場所や思い出を積み重ねることで育ちます。そして、それは大人になっていくためにとても大切です。孤立や孤独が、人生にとってろくなことにならないということは歳をとってしみじみ思うことです。

#### 取材を終えて

山芋の会は細い路地の奥、街の片隅にある小さな居場所です。利用する子どもも十数名と多くはありませんが、昔の大家族のような雰囲気が子どもにも、そして日々忙しい保護者にも、安心できる居心地の良い場所なのだろうと感じました。

子どもやその家族が抱える様々な問題を受け止めながらも、学習や体験活動を通して、子どもたちの生きるチカラを養い、達成感や自信を得て、どんな環境にも負けない強さを持って生きていけるよう支援していることがよくわかりました。

5年間続けたこの居場所が閉鎖されることは、子どもや保護者にとっても、とても残念なことでしょう。六ツ川の団地での新たな居場所には、大きな期待がありますが、居場所になる「場」が不可欠であることは、本事例に出会い痛切に感じました。

「山芋の会」は大きな場の確保がなかったわけではありません。「山芋の会」が目指す家族的なスタイルがあり、この場合は、会議室や研修室等の公共スペースが必ずしもふさわしいわけでもありません。

伝え方が難しいのですが、少し、閉ざされた場だからこそ、温かくて、安心感があって、帰属意識を持つことができ、家族のように温かく見守ってくれる大人や仲間を感じることができる。そして、そんな場から、子どもの生きるチカラがゆっくりと育てられていくのかもしれない。こうした活動をなんとか継続できる仕組みがつくれないものかと考えさせられました。